

看護系大学生の健康・セルフ・エスティーム(SE)・看護に関する意識

橋本和子¹⁾ 森木妙子¹⁾ 尾原喜美子¹⁾ 橋本結花¹⁾
Lee Jeong seop²⁾ Moon-Hee Jung²⁾ 谷田恵美子³⁾

高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮¹⁾
漢陽大学校 17 Hangdangdong Songdongku Seoul, 133-791, Korea
吉備国際大学保健科学部看護学科 〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8³⁾

Nursing College-Students'-View on Their Own Health, Self Esteem, and Nursing Profession

Kazuko HASHIMOTO¹⁾ Taeko MORIKI¹⁾ Kimiko OHARA¹⁾ Yuka HASHIMOTO¹⁾
Lee Jeong seop²⁾ Moon-Hee Jung²⁾ Emiko TANIDA³⁾
Dept. of Nursing, Kochi Univ., Kochi Japan¹⁾
Dept. of Nursing, Hanyang Univ., Seoul Korea²⁾
Dept. of Nursing, Kibi International Univ., Okayama Japan³⁾

Abstract

This study was designed to elucidate the awareness about health state of their own, self esteem, and image about nursing practice of college nursing students so as to improve the efficiency of education. We investigated the relation either between self esteem and mental health or between self esteem and image about nursing profession. The results showed a strong relation between awareness about the health state, the factors affecting the self esteem and the image about nursing profession.

Key Words : Self Esteem, Health, Nursing

キーワード : セルフ・エスティーム、健康、看護

I. はじめに

セルフ・エスティームに結びつく概念は受け取り方によって、自分自身に対する感情の安定の得方が過大評価になったり、過小評価になったりすることがある。学生の中で、大学生活への自己の限界が無価値観、不適當感、劣等感、不安感等として経験すると、人間関係行動が孤立し消極的な方向へと進む例も少なくない。

人間相手に精神面を配慮して援助を行う看護専門職者の人間関係行動が孤立する状況では、患者・家族との治療的人間関係の確立は図れない。そのため学生時代から様々な経験を通して、セルフ・エスティームを正當に評価し、かつ健康や看護への関心を高めていくことが必要であると感じた。

そこで、今回看護専門職を目指す学生への教育上の示唆を得るために、看護学生が健康、セルフ・エスティーム、看護に関して、どのような意識を持っているのかを調査した。さ

らにセルフ・エスティームと健康、セルフ・エスティームと看護との因果関係を探求することにより、健康と心の持ち方の相関、セルフ・エスティームを高めたり低めたりするベース、看護に関する職業イメージの高揚を左右するものなどを明らかにした。

II. 研究目的

1. 看護系大学生が健康・セルフ・エスティーム(SE)・看護に関してどのような意識を抱いているのかを明らかにする。
2. 健康状態がよいと意識する学生についてどのような健康の意識が関係しているのかを明らかにする。
3. セルフ・エスティーム(SE)とその変数との関係を明らかにする。
4. 看護に関する意識の中で、どのような職業イメージが関係しているのかを明らかにする。
5. セルフ・エスティーム(SE)と健康、および看護との関係を明らかにする。

III. 研究の枠組み

1. 用語の操作的定義

セルフ・エスティームとは、自己概念を構成する因子の1つで、個人が自己を尊敬し、自己を価値あるものとするかどうかの感情(自尊感情)である。

2. 研究の枠組み

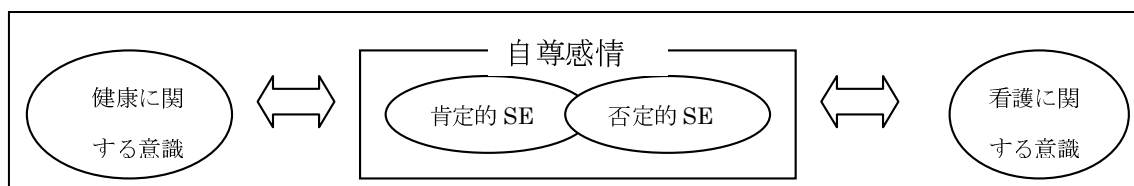


図1 要因図

IV. 研究方法

1. **調査期間**：平成16年6月～7月
2. **調査対象者**：看護系大学生1年生から4年生の274名
3. **調査方法**：質問紙による量的調査
4. **調査項目**：
 - ①健康に関する項目は、健康日本21の具体的目標に基づき項目を選定した。
 - ②セルフ・エスティームに関する項目は、ローゼンバーグの10項目を使用した。
 - ③看護に関する項目は、橋本・岩橋らの平成3年国立病院療養所四国地区総看護婦長協議会による「看護職に対する意識調査と人材確保対策」に基づいて、看護婦の職業イメージの結果から「社会に貢献できる職業」「専門職」「女性に適した職業」「経済的に安定した職業」「社会的評価が高い」「医師の助手的職業」の6項目と看護婦の仕事から受けるイメージの結果から、「汚い仕事」「きつい(忙しい)仕事」の2項目を抽出し、8つの質問項目を作成した。
尺度は、間隔尺度として4段階評定法を用いた。

5. 分析方法：統計ソフト SPSS (Ver. 11.5) を使用し、どのような意識が関係しているのかを明らかにする為に、カイ 2 乗検定とピアソンの積率相関係数を用いた。また変数間の因果関係を明らかにするためにステップワイズ法による重回帰分析を用いた。

6. 倫理的配慮：

- ①学生に研究の目的、意義、方法を口頭で説明し、質問紙を手渡し研究協力の承諾を得た。
- ②質問紙調査への協力の有無は対象者の個人の自由意志であり、研究へ参加しない場合であっても、成績に関係しないことを説明し、不参加による不利益を被らないことを保障した。
- ③質問紙への回答・回収は無記名で、各対象者個人で返信用封筒に封をし、大学にボックスを準備し、留め置き回収とした。
- ④得られたデータは研究目的以外に使用せず、データは統計的に処理し、大学や個人のプライバシーを保護した。

V. 結果

1. 対象の概要：274 名に質問紙を配布し回答者数は 215 名 (78.5%) であった。平均年齢 21.03 (±2.39) 歳であり、性別は女性が 211 名 (98.1%)、男性が 4 名 (1.9%) であった。

2. 記述統計による結果

1) 大学生の健康に関する意識を調査した結果、各項目の人数とその比率は表 1 の通りであった。「健康状態が良い」と意識する学生は「いつも思う」「しばしば思う」を合わせると、全体の 215 名のうち 165 名 (86.8%) を占めていた。「食事栄養に気を配る」と意識する学生は 116 名 (53.9%) であり、「運動やスポーツに心がける」は 96 名 (44.7%) であった。「休息睡眠に心がける」は 142 名 (66.0%)、「心の持ち方に気をつける」は 137 名 (63.8%) であった。

表 1 健康に関する意識 (人数と比率)

	全く思わない	たまに思う	しばしば思う	いつも思う
健康状態がよい	14 名 (6.5%)	36 名 (16.7%)	121 名 (56.3%)	44 名 (20.5%)
食事栄養に気を配る	19 名 (8.8%)	80 名 (37.2%)	88 名 (40.9%)	28 名 (13.0%)
運動やスポーツに心がける	33 名 (15.3%)	86 名 (40.0%)	55 名 (25.6%)	41 名 (19.1%)
休息睡眠に心がける	7 名 (3.3%)	66 名 (30.7%)	79 名 (36.7%)	63 名 (29.3%)
心の持ち方に気をつける	13 名 (6.0%)	65 名 (30.2%)	90 名 (41.9%)	47 名 (21.9%)
ビタミン剤栄養剤の使用	91 名 (42.3%)	62 名 (28.8%)	44 名 (20.5%)	18 名 (8.4%)
常備薬の使用	112 名 (52.1%)	74 名 (34.4%)	21 名 (9.8%)	8 名 (3.7%)

2) また健康に関して、全体の平均より高い項目は 5 つあり、平均値の高い順に「健康状態が良い」と意識した学生の平均は 2.91 (SD.792) であった。具体的な意識としては、「休息睡眠に心がける」の平均が 2.92 (SD.853)、「心の持ち方に気をつける」の平均が 2.80 (SD.851)、「食事栄養に気を配る」の平均が 2.58 (SD.827) であった。栄養剤や常備薬の使用の意識は

平均値が低かった(表2)。

表2 健康に関する意識 (平均・標準偏差)

	平均値 (標準偏差)
健康状態がよい	2.91 (.792)
食事栄養に気を配る	2.58 (.827)
運動やスポーツに心がける	2.48 (.971)
休息睡眠に心がける	2.92 (.853)
心の持ち方に気をつける	2.80 (.851)
ビタミン剤栄養剤の使用	1.95 (.982)
常備薬の使用	1.65 (.805)
全体	2.47 (.472)

3) 大学生のセルフ・エスティーム(SE)に関する意識を調査した結果、各項目の人数とその比率は表3の通りであった。肯定的SEでは「すべて自分に満足している」と答えた学生は「いつも思う」と「しばしば思う」学生を合わせて、213名のうち48名(22.3%)であった。「見どころがあると思う」と答えた学生は83名(38.6%)、「大抵のひとがやれる程度に物事ができる」と答えた学生は、121名(56.3%)であった。「他人と同じ価値ある人間」と答えた学生は104名(48.4%)、「前向きな態度をとっている」と答えた学生は125名(58.2%)であった。

それに対し否定的SEについて「自分がまるでだめと思う」と答えた学生は「いつも思う」と「しばしば思う」学生を合わせて、213名のうち78名(36.3%)であった。それ以外の項目は「得意に思うことがない(63名29.3%)」「自分が役立たずと感じる(54名25.1%)」「自分を尊敬できたらと思う(100名46.5%)」「自分を失敗者(33名15.4%)」という結果であった。

表3 セルフ・エスティーム(SE)に関する意識 (人数・比率)

	全く思わない	たまに思う	しばしば思う	いつも思う
すべて自分に満足している	69名 (32.1%)	96名 (44.7%)	42名 (19.5%)	6名 (2.8%)
自分がまるでだめと思う	19名 (8.8%)	116名 (54.0%)	68名 (31.6%)	10名 (4.7%)
見どころがあると思う	29名 (13.5%)	101名 (47.0%)	63名 (29.3%)	20名 (9.3%)
大抵のひとがやれる程度に物事ができる	10名 (4.7%)	81名 (37.7%)	101名 (47.0%)	20名 (9.3%)
得意に思うことがない	37名 (17.2%)	113名 (52.6%)	48名 (22.3%)	15名 (7.0%)
自分が役立たずと感じる	31名 (14.4%)	128名 (59.5%)	49名 (22.8%)	5名 (2.3%)
他人と同じ価値ある人間	15名 (7.0%)	94名 (43.7%)	90名 (41.9%)	14名 (6.5%)
自分を尊敬できたらと思う	23名 (10.7%)	90名 (41.9%)	61名 (28.4%)	39名 (18.1%)
自分を失敗者	75名 (34.9%)	105名 (48.8%)	27名 (12.6%)	6名 (2.8%)
前向きな態度をとっている	12名 (5.6%)	76名 (35.3%)	84名 (39.1%)	41名 (19.1%)

4) 大学生の看護に関する意識について、各項目の人数とその比率は表4の通りであった。9割以上の学生が「看護職は専門職」「経済的に安定した職業」「社会貢献できる職業」「きつい仕事」と意識していた。

表4 看護に関する意識 (人数・比率)

	全く思わない	あまり思わない	少し思う	全くそう思う
看護職は専門職	2名 (0.9%)	2名 (0.9%)	36名 (16.7%)	174名 (80.9%)
経済的に安定した職業	1名 (0.5%)	6名 (2.8%)	96名 (44.7%)	111名 (51.6%)
社会的評価が高い	6名 (2.8%)	53名 (24.7%)	104名 (48.4%)	50名 (23.3%)
医師の助手的職業	23名 (10.7%)	64名 (29.8%)	110名 (51.2%)	16名 (7.4%)
女性に適した職業	14名 (6.5%)	82名 (38.1%)	98名 (45.6%)	20名 (9.3%)
社会貢献できる職業	1名 (0.5%)	6名 (2.8%)	66名 (30.7%)	140名 (65.1%)
汚い仕事	32名 (14.9%)	86名 (40.0%)	85名 (39.5%)	11名 (5.1%)
きつい仕事	2名 (0.9%)	7名 (3.3%)	58名 (27.0%)	147名 (68.4%)

5) また看護に関する意識の平均値と標準偏差は表5の通りであった。全体の平均より高い項目は4つあり、最も高い順に「看護は専門職」と意識した学生の平均は3.79(SD.495)、「きつい仕事」と意識した学生の平均は3.64(SD.596)、「社会貢献できる職業」の平均は3.62(SD.567)、「経済的に安定した職業」の平均が3.48(SD.579)であった。全体の平均より低かった項目は、「社会的評価が高い(平均2.93SD.771)」、「医師の助手的職業(平均2.56SD.785)」、「女性に適した職業(平均2.58SD.751)」、「汚い仕事(平均2.35SD.795)」であった。

表5 看護に関する意識(平均・標準偏差)

	平均値 (標準偏差)
看護職は専門職	3.79 (.495)
経済的に安定した職業	3.48 (.579)
社会的評価が高い	2.93 (.771)
医師の助手的職業	2.56 (.785)
女性に適した職業	2.58 (.751)
社会貢献できる職業	3.62 (.567)
汚い仕事	2.35 (.795)
きつい仕事	3.64 (.596)
全体	3.11 (.324)

3. 推測統計による結果

1) 「健康状態が良い」と意識するほど、有意に心がけていることは何かを明らかにする為に、 χ^2 検定を行なった結果、健康状態が良いと「いつも思う」「しばしば思う」グループは、「全く思わない」「たまに思う」グループに比べて、食事栄養に気を配っていることがわかり、健康状態と食事栄養との間に有意な関係が見られた。 $(\chi^2(9, N=215) = 23.591, p < .01)$ また運動やスポーツとの間にも有意な関係 $(\chi^2(9, N=215) = 37.118, p < .01)$ が見られ、休息睡眠との間にも有意な関係 $(\chi^2(9, N=215) = 21.859, p < .01)$ が見られた。心の持ち方に関して有意な関係 $(\chi^2(9, N=215) = 40.672, p < .01)$ であった。

2) ピアソンの積率相関係数でその相関の強さを検定した結果、「運動・スポーツ」との相関 $(\gamma = .357, p < .01)$ が最も強く、続いて「休息・睡眠」との相関 $(\gamma = .287, p < .01)$ 、「食事・栄養」との相関 $(\gamma = .276, p < .01)$ 、「心の持ち方」との相関 $(\gamma = .256, p < .01)$ が成立した (図2)。

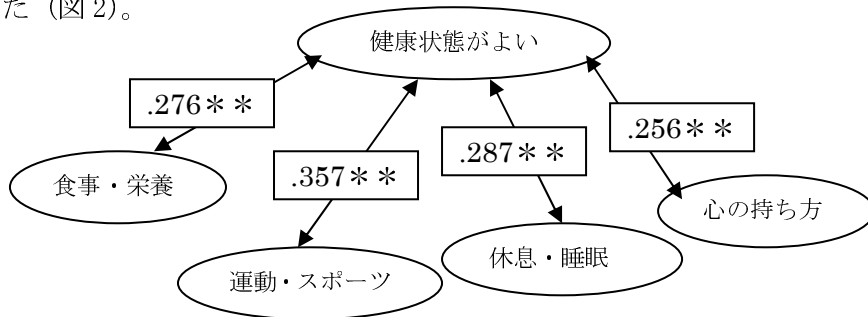


図2 健康に関する意識の相関関係

3) さらに「食事・栄養」と他の健康意識との相関関係を分析すると、「食事・栄養」と「運動・スポーツ」との相関は $\gamma = .364, p < .01$ であり、続いて「食事・栄養」と「休息・睡眠」との相関は $\gamma = .370, p < .01$ 、「食事・栄養」と「心の持ち方」との相関は $\gamma = .369, p < .01$ の関係であった (図3)。

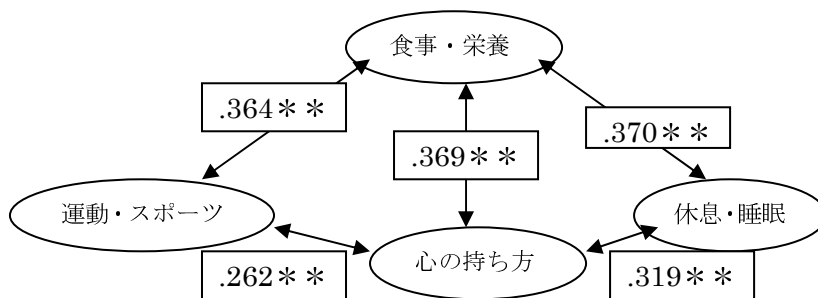


図3 食事・栄養と他の健康意識との関係

4) 大学生のセルフ・エスティーム(SE)に関する意識を調査した結果、総点よりA群 B群 C群の内訳は、A群(20点以下でSEが低い人)34人(16.0%)、B群(21~29点でSEが中間の人)175人(82.6%)、C群(30点以上でSEが高い人)3人(1.4%)であった。

そこで、従属変数をSE総点、独立変数をローゼンバーグの各10項目とし、どの項目がSE総点の高さに関係しているかを重回帰で分析を行った結果、A群には「自分がまるでだ

めだと思う ($\beta = .327$ $P < 0.05$)」と「見どころがあると思う ($\beta = .487$ $P < 0.01$)」の 2 項目が関係し 8 項目が関係があるとは言えなかった (図 4)。

B 群には「すべて自分に満足している ($\beta = .362$ $P < 0.01$)」、「自分がまるでだめだと思う ($\beta = .425$ $P < 0.01$)」、「見どころがあると思う ($\beta = .397$ $P < 0.01$)」、「大抵の人がやれる程度に物事ができる ($\beta = .313$ $P < 0.01$)」、「得意に思うことがない ($\beta = .461$ $P < 0.01$)」、「他人と同じ価値ある人間 ($\beta = .307$ $P < 0.01$)」、「自分を尊敬できたらと思う ($\beta = .464$ $P < 0.01$)」、「自分を失敗者 ($\beta = .445$ $P < 0.01$)」、「前向きな態度をとっている ($\beta = .375$ $P < 0.01$)」の 9 項目が関係し、「自分が役立たずと感じる」項目のみ関係がなかった (図 5)。C 群に関しては人数が 3 人の為、分析することができなかった。

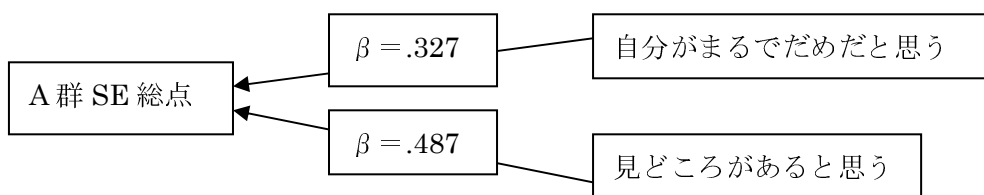


図 4 A 群 SE 総点と項目との関係

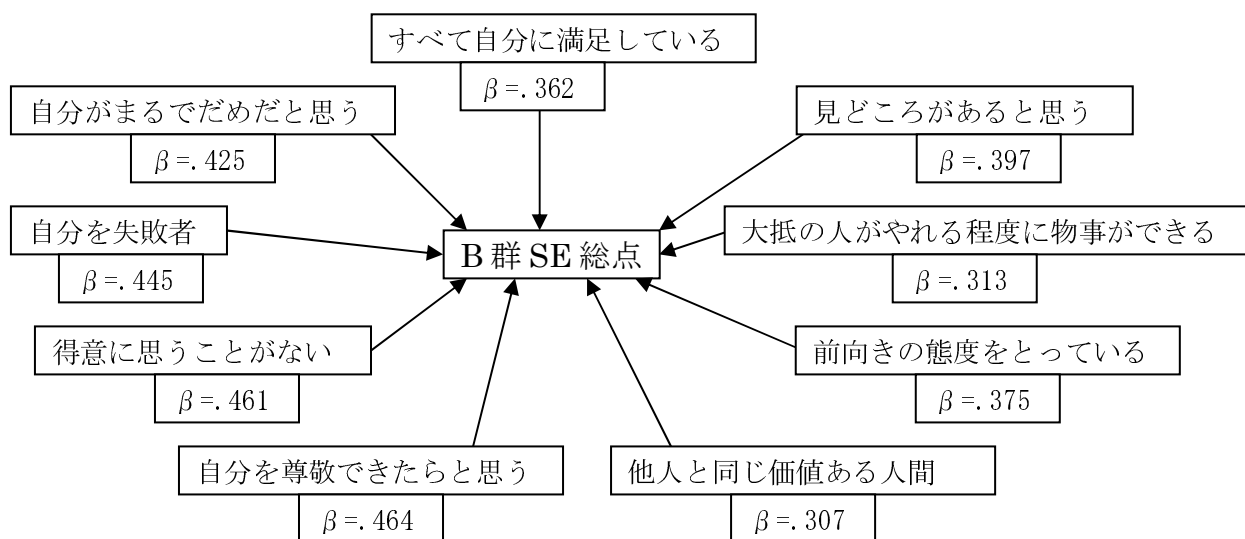


図 5 B 群 SE 総点と項目との関係

5) 看護に関する意識のなかで「社会貢献できる職業」と意識するほど、どのような職業イメージが関係しているのか、 χ^2 検定を行なった結果、「社会貢献できる職業」と意識するほど「全くそう思う」「少し思う」グループは、「全くそう思わない」「あまり思わない」グループに比べて、「看護職は専門職」(χ^2 (9, N=213) =140.912, $p < .01$)との間に有意な関係がみられた。また「経済的に安定した職業」の間にも有意な関係 (χ^2 (9, N=213) =216.822, $p < .01$)が見られ、「社会的評価が高い」との間にも有意な関係 (χ^2 (9, N=213) =69.895, $p < .01$)が見られた。「女性に適した職業」についても有意な関係 (χ^2 (9, N=213) =19.508, $p < .05$)であった。それに対し「医師の助手的職業」(χ^2 (9, N=213) =13.027、

n. s.)」、「汚い仕事 (χ^2 (9, N=213) =15.416, n. s.)」、「きつい仕事 (χ^2 (9, N=213) =6.653, n. s.)」とは有意な関係はなかった。

6) セルフ・エスティーム (SE) と健康との関係について従属変数を SE 総点、独立変数を健康に関する項目とし、重回帰分析 (ステップワイズ法) を用いて有意性検定を行なった結果、群別に関係なく「心の持ち方」がセルフ・エスティームに関係していた。 ($\beta = .223$ P<.01) B群においては「健康状態がよい」と意識する学生ほどセルフ・エスティームと有意な関係があると言えた。 ($\beta = .149$ P<.05)、B群C群を合わせると、「休息睡眠に心がける」ことを意識する学生ほどセルフ・エスティームと有意な関係があった。 ($\beta = .173$ P<.05)

さらにセルフ・エスティーム (SE) の「すべての点で自分に満足している」項目は、「健康状態が良い」と「心の持ち方に気をつける」意識と関係があることがわかった (図6)。

7) セルフ・エスティーム (SE) と看護との関係について従属変数を SE 総点、独立変数を看護に関する項目とし、重回帰分析 (ステップワイズ法) を用いて有意性検定を行なった結果、「すべて自分に満足している」セルフ・エスティームが「経済的に安定した職業」「きつい仕事」の看護に関する意識と関係があることがわかった。「看護職は専門職」である意識や「社会的評価が高い」「社会貢献できる職業」の意識は関係していなかった (図7)。

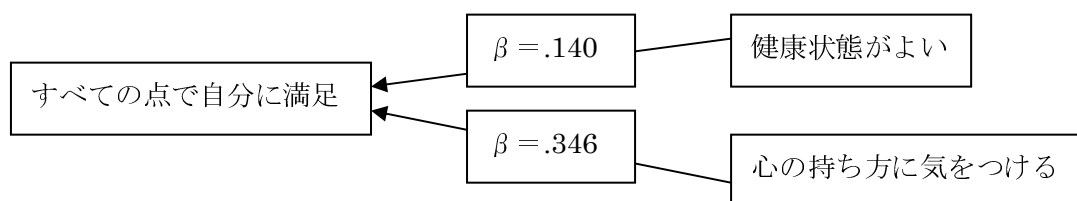


図6 すべての点で自分に満足している SE と健康意識との関係

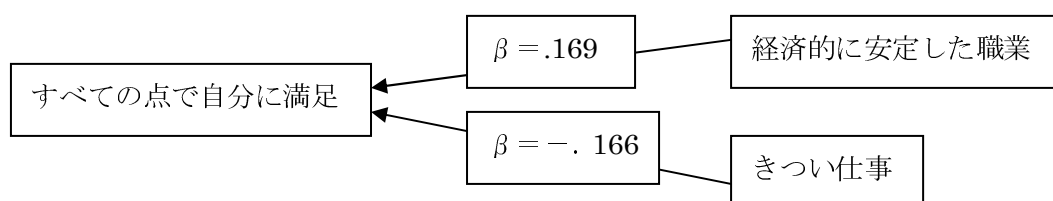


図7 すべての点で自分に満足している SE と看護に関する意識との関係

VI. 考察

1. 健康に関する意識

健康状態がよいと答えた学生が全体の 86.8%を占めていた結果より、看護系大学生は健康への意識が高いことが予測される。健康状態が良いと意識することと「食事・栄養」「運動・スポーツ」「休息・睡眠」「心の持ち方」の間には相関があり、健康のために日常生活行動としての食・活動・休息の 3 点に気を配り、生活リズムの調整を心がけていることや精神的健康も重視していることがわかった。

また「食事・栄養」と他の健康意識との関係から、健康に関して最も核となっているのは「食事・栄養」に関する意識であり、他の健康意識を高める相乗効果をもたらすのではないかと考えられる。

2. セルフ・エスティーム(SE)について

大学生のセルフ・エスティーム(SE)は、総点より 175 人の 82.6%の学生が SE が中間群であり、高いとも低いとも言えない結果であった。A 群(低い群)では、「自分がまるでだめだと思う」と「見どころがあると思う」感情が関係していることから、SE が低くなる原因として、見どころがあると肯定する部分を持ちながら、それと逆行するだめだと否定する部分との間で葛藤状態に陥っていることが考えられる。

エリクソンは心理・社会的危機とアイデンティティ形成の中で、幼少期から自己信頼感と自己肯定感を養い、青年期において同一化できる自己発達を得ることを述べている¹⁾。つまり幼少期に自己信頼感や自己肯定感がどの程度養われてきたかという成長発達の違いにより、セルフ・エスティームは影響されることが考えられる。つまりこの 2 つの意識の不一致の状態あるいは同一化の程度が SE 総点を低くしているのではないだろうか。

セルフ・エスティームの低い学生には、学生の行動や努力を認めるプロセスを繰り返し行なうことで、自己肯定感や自己信頼感を養い同一化を助けていく必要があるのではないだろうか。また学生のやる気につながる教員のかかわりが必要とされているのではないかと考える。

B 群(中間群)に位置する 8 割の看護系大学生は、10 項目のうち 9 項目が因果関係が成立し、多くの経験を通じて、複数の肯定的自尊感情と否定的自尊感情がiriみだれることで、そのバランスがコントロールされているのではないかと考えられる。佐藤は、青年後期から成人初期の発達危機および状況危機への対処について「予備的準備性が必要で、この準備性の最大のもは自己洞察できる自己を個人が育てることであろう。」と述べている¹⁾。つまり双方の自尊感情のなかでジレンマを体験し、自己概念を確立するプロセスを通じて、セルフ・エスティームがコントロールされていくものと考えられる。

3. 看護に関する意識

看護に関する意識のうち大学生の 9 割以上のものが、「看護職は専門職」、「経済的に安定した職業」、「社会貢献できる職業」、「きつい仕事」と意識していた。これらの平均はどれも 3.5 前後と全体の平均を上回り、かつ標準偏差も低いことから学生にばらつきなく 4 つの意識が高いことが考えられる。

また「社会貢献できる職業」と意識するほど他の肯定的職業イメージと有意な関係にあったことから、看護に関する意識の認知は「社会貢献できる職業」のイメージを高められるよう意識づけすることが他の肯定的職業イメージを高めると考えられる。

4. セルフ・エスティーム(SE)と健康との因果関係

健康に関する意識の中で心の持ち方がセルフ・エスティームと関係していた結果から、心の持ち方をどのように調整することができるかで、学生のセルフ・エスティームは流動的に変化するものと考えられる。看護学実習や演習などにおいて心の持ち方が健康であるかどうかにより、学習の学びは影響されるものと考えられる。また休息と睡眠に心がける意識がセルフ・エスティームを高めることのベースにあり、健康状態をよりよく、特に心の持ち方に気をつけるためには、学生にとって休息がいかに重要であるかということが研究結果から言える。

看護系大学生に求められる卒業時の学習到達度として、幅広い専門的な知識・技術そして態度が求められている。そのため密度の濃いカリキュラムをこなしながら、休息を忘れず心のリフレッシュをすることが学生のセルフ・エスティームに関係し、学習継続や学習効果に影響するものと考えられる。

5. セルフ・エスティーム(SE)と看護との因果関係

看護に関する意識の中で、看護職について経済的に安定した職業であると考え、またきつい仕事とは意識しない学生ほど、すべての点で自分に満足していることがわかった。

学生にとって看護職が経済的に安定した職業であるかどうかと、きつい仕事を意識することから考えると仕事の忙しさやむつかしさが大切なのであり、看護が専門職であることや社会的評価・社会貢献できる職業であることの意識は、セルフ・エスティームを左右していなかった。しかしグレッグ美鈴によると、「自己の看護実践の承認は、自尊心や自己効力に結びつく概念であり、個人の資質やその個人を取り巻く環境の影響が大きいと考えられる」と述べられている²⁾。看護系大学生においても、学生時代の演習や臨床実習での自己の看護実践をどのように認識するかにより、セルフ・エスティームに結びつくことが考えられ、学生への関わりが多い大学教員の影響が大きいことが考えられる。

Ⅶ. 結論

1. 「健康状態がよい」と意識する学生は、日常生活の中で食事・活動・休息・心の持ち方に気をつけていた。そのうち最も中核となる意識は「食事・栄養」に関する意識であった。
2. セルフ・エスティームと健康に関する意識との関係は、「心の持ち方に気をつける」ことが関係していた。
3. SE総点が中間群・高い群では、「休息・睡眠に心がける」意識が関係し、「休息・睡眠」がセルフ・エスティームを高めるベースとして重要であることが明らかになった。
4. セルフ・エスティームが低くなる原因として、学生は「見どころがあると思う」と肯定する感情を持ちながら、それと逆行する「自分がまるでだめだと思う」と否定する感情との間で葛藤状態に陥っていることが考えられる。
5. 看護に関する意識の中で、「社会貢献できる職業」を意識する大学生ほど、「看護職は専門職」、「経済的に安定した職業」、「社会的価値が高い」、「女性に適した職業」と関係があることが明らかになった。
6. セルフ・エスティームは、健康について心の持ち方に気をつけながら健康状態が良いと意識し、看護職について経済的に安定した職業であると考え、またきつい仕事とは意

識しない学生ほど、すべての点で自分に満足していることがわかった。

(本研究は、高知大学医学部看護学科と総合交流協定を締結している漢陽大学校医学部看護学科との共同で取り組んだ学術論文の一部である。)

引用文献

1. 佐藤昇子 (1998) 看護職のキャリア形成に関する問題とその概念枠組み INR 21 (2) 55～69
2. グッレグ美鈴 (2002) 看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築 看護研究 35 (3) 196～203

参考文献

1. 遠藤辰雄他 (1998) セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求、ナカニシヤ出版、
2. 橋本和子他 (2001) 老年者と SE (Self-Esteem) -よりよく生きることの意味-、吉備国際大学保健科学部研究紀要 第6号、1～7
3. 橋本和子他 (2001) 精神障害者のセルフエスティームに関する研究-セルフエスティームに影響を及ぼす要因- 四国地区国立病院療養所看護研究学会誌 Vol12 108～111
4. 橋本和子 (2002) 精神障害者の療養形態とセルフエスティーム 看護・保健科学研究 1 (2) 17～23
5. 石橋照子 橋本和子他 (2001) 精神障害者の日常生活能力とセルフ・エスティームおよびモラルとの関連 第7回中日護理学術交流会議 198～200
6. 橋本和子他 (2002) 日本とフィリピンの大学生の Self - Esteem に関する意識 1 (2) 37～47
7. 厚生統計協会 (2004) 国民衛生の動向 51 (9) 77～79
8. Lee Jeong seop, Kazuko HASIMOTO (2005) Perception of Korean Nursing Students on Their Self - Esteem, Family and Nursing Profession、看護・保健科学研究誌 5 (1) 133～153